

かぶのは種期と収量性について

1 試験のねらい

かぶは春及び秋を中心に幅広くは種されているが、は種時期によっては早期裂根やす入り、病害及び寒害などの影響で収穫皆無となる場合がある。したがって、生産を安定させるためにはは種期に応じた生育特性を十分理解し、は種適期や限界を把握しておくことが重要と考えられたため、昭和55～56年の2か年にわたりは種期と生育、収量の関係につき、栽培様式を組み合わせ検討した。

2 試験方法

耐病ひかり、金町小かぶ及びたかねの3品種を供試し、昭和55年8月1日から56年7月1日まで20～30日間隔に16回は種し、それぞれのは種期に応じトンネル及び露地を組み合わせた。規模は1区3m²、1区制で、トンネル及び露地とも60cm幅のベットに散播し、生育に応じて3～4回間引きを行い株間約15cmとした。なお、トンネルはポリフィルムを用いて、昼温30℃以下で管理を行った。

3 試験結果及び考察

は種期及び栽培様式の相違による各品種の収穫時期は、図-1のとおりであるが、トンネル栽培では10月1日は種の金町小かぶ、10月20日は種の金町小かぶ及びたかねは早期裂根や寒害のため収穫できず、また、11月20日～2月10日は種では各品種とも寒さの影響をうけ枯死株が多発し、この期間の実用的な栽培は困難と思われた。一方、露地栽培は6月10日及び7月1日は種で早期裂根やす入り及びキスジノミハムシの被害などによる品質低下が著しく収穫不能となったが、トンネルや露地栽培でみられた早期裂根は土壌の乾燥も大きく影響したものと考えられる。なお、いずれのは種期とも収穫始期はたかねが最も早く、次いで耐病ひかり、金町小かぶの順で、収穫期間は耐病ひかりが最も長く、たかねは短かった。

根重はは種期や品種によって異なり、は種期間では各品種とも3月は種のトンネル栽培が最も重く、次いで8月20日は種の露地栽培であったが、品種では耐病ひかりが各は種期とも他品種に比較し重い傾向を示した。また、品質は耐病ひかりが金町小かぶ、たかねより優れ、裂根やす入りとも遅く、このことが収穫期間を長くしている要因と考えられる。

病害は5月20日は種で軟腐病及びべト病が多発し被害を受けたほかは、各は種期とも栽培上問題となるような発生は認められなかった。

4 成果の要約

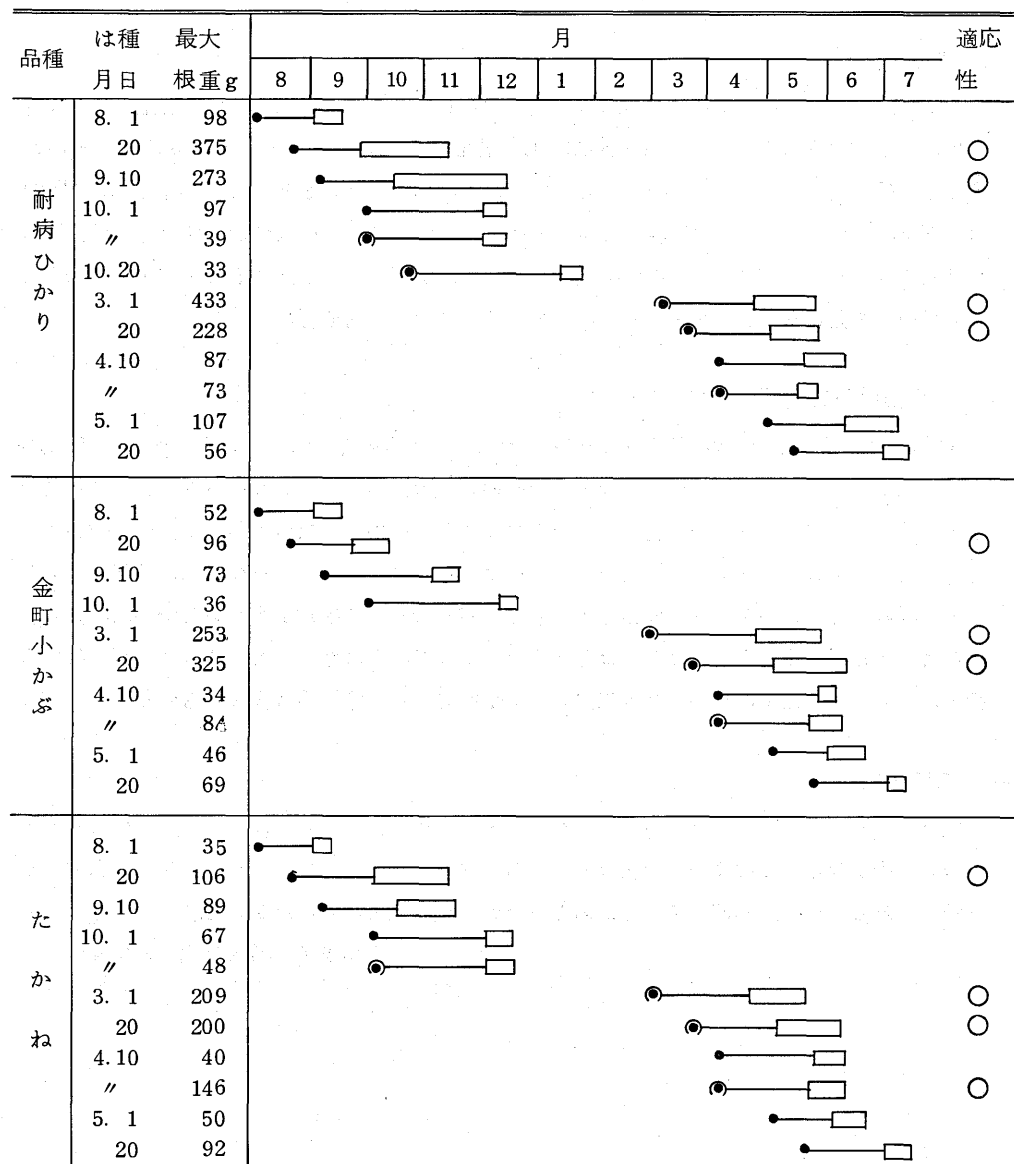
かぶのは種期と生育、収量の関係を明らかにするため、栽培様式を組み合わせ検討した結果、各品種ともトンネル栽培は2月下旬～3月下旬、露地栽培では4月上旬～5月中旬及び8

月上旬～10月上旬は種が可能と推察されたが、最適は種期はトンネル栽培が3月、露地栽培は8月下旬と考えられた。なお、耐病ひかりは春及び秋まきともに適し、金町小かぶ及びたかねは春まきにより適する品種と思われた。

(担当者 野菜部 長 修, 福田 映※)

※現鹿沼分場

図-1 は種期及び栽培様式と根重及び収穫期の関係



注. ●露地は種 ●トンネルは種 □収穫期 印は最適は種期